現代日本の建築家による一室空間形式の住宅の設計意図 近代主義建築の空間言語を題材とした現代建築家の住宅設計論に関する研究

DESIGN THEME IN HOUSES WITH UNIFIED FLOOR PLAN BY CONTEMPORARY JAPANESE ARCHITECTS

A study on contemporary design theories of houses with the spatial theme of Modernist Architecture

四ヶ所 高志*, 塩崎 太伸**, 奥山 信一***

Takashi SHIKASHO, Taishin SHIOZAKI and Shin-ichi OKUYAMA

The unified floor plan, with no interior division except for service spaces, is one of the most characteristic modernist spatial types for residences, as exemplified by the *Farnsworth House* (Mies van der Rohe, 1945-51). After World War II a number of such houses, referred to in Japan as “one-room house”, made their appearance. Here we aim to illustrate and examine how Japanese architects of the time extrapolated a design theme from this model, based on a study of such work as it appeared in architectural publications. Initially, two aspects of the unified floor plan concept were selected, and each scheme was then subjected to a “KJ-method” analysis (originated by KAWAKITA Jiro). First, we scrutinized the architect’s intention in adopting a unified floor plan. Secondly, we attempted to assess each architect’s distinct view of the spatial character of the prototype, as exemplified in his deployment of this model. At this point, the composition of each house was correlated with regard to two aspects involving relationship between inside and outside. Namely, positioning of apertures and the interrelation of building to site. Finally, the mediation between each architect’s thinking and the final composition has been plotted in terms of this dual classification.

Keywords : *unified floor plan, spatial form, Modernist Architecture, residential design theory, contemporary Japanese architects, KJ method*

一室空間, 空間形式, 近代主義建築, 住宅設計論, 現代日本の建築家, KJ 法

1. 序

1.1. 研究の背景と目的

住宅内の空間を、設備機能を除きひとつの空間として構成する一室空間形式^{注1)}は、新たな生活様式が求められた1950年代以降、住宅の空間形式のプロトタイプとして注目され、これまで多くの建築家^{注2)}によってさまざまな実践的な試みが行われてきた。たとえば戦後小住宅を代表する増沢洵の自邸は、9坪という極小空間を住宅として成立させるために、限られた要素により空間を簡潔に構成することで、吹抜けを介して立体的に展開される住空間に軽快さと一体的な広がりをつくり出している。また近年では、西沢立衛による“ウィークエンド・ハウス”は、柱が均等に並ぶ一室空間にガラスで囲われた光庭を挿入することで、視覚的な広がりを残しながらも空間を緩やかに分節し、均質な空間の中に生活に応じた居場所をつくり出している。一般に住宅は機能や家族構成に応じて分節された室の集合として計画されることが多いなかで、このような一室空間形式の住宅には、その構成の単純さや現象する空間の純粹さと連関した設計のコンセプトが投影されるものと考えられる^{注3)}。また、そうした具体的な空間構成を

前提とした建築家のコンセプトが現実の空間として実践される中に、新たな建築的テーマが見出されてきたと考えられる^{注4)}。

一室空間形式は、このような現代の建築においてのみならず、たとえば竪穴式住居のような、建築が文化的枠組みによって制度化される未だの原初的な住居にも見出すことができる。しかし、ミース・ファン・デル・ローエによるファンズワース邸が“ユニヴァーサル・スペース”という空間概念とともに語られるように^{注5)}、特定の時代精神を反映し、空間をつくるための方法として純化したという意味において、一室空間形式は近代主義建築を代表する空間言語のひとつと捉えることもできる^{注6)}。このような観点において一室空間形式に関する建築家の思考の総体を検討することは、理念と実体との一元的な関係を指摘されることの多い近代主義建築の枠組みを捉え直す新たな視座^{注7)}を与えるものとも考えられる。そこで本研究では、現代日本の建築家による一室空間形式の住宅作品を資料とし^{注8)}、設計者によって著された設計論の内容を作品の実体的側面との関連性を含めて検討することで、住宅設計において実体の空間形式と連関する建築家の思考の一端を明らかにすることを目的とする^{注9)}。

本論文は1999年度建築学会大会学術講演会で発表されたものを修正してまとめたものである。

* 東京工業大学 補佐員・修士(工学)

** 東京工業大学大学院建築学専攻 助教・博士(工学)

*** 東京工業大学大学院建築学専攻 教授・博士(工学)

Research Assoc., Tokyo Tech., M. Eng.

Assistant Prof., Dept. of Architecture and Building Engineering, Tokyo Tech., Dr. Eng.

Prof., Dept. of Architecture and Building Engineering, Tokyo Tech., Dr. Eng.

1. 2. 既往研究及び本研究の意義

一室空間形式の住宅に関する近年の研究において、特にその実体的側面に着目したものは、横山、坂本らによるワンルーム住宅の内部構成と外部の関係性に関する研究など^{注10)}のように、現代の建築家による一室空間形式の住宅の空間構成における修辭的性格を検討するものや、佐野によるミース・ファン・デル・ローエによるファンズワース邸の室内平面にみられる黄金比に関する研究^{注11)}のように、著名な建築家の作品の実体構成における幾何学的性格を検討するものなどが挙げられる。これらは一室空間形式の実体構成を意匠論的・建築史的に考察するものとして成果をあげているが、創作の主体としての建築家の言説を資料として一室空間形式の住宅が現代社会の中に成立してきた枠組みに関して検討した研究はこれまでのところ見受けられない。また本論のように、建築家の言説活動を対象とした研究はこれまで数多くみられ、那須らによる「ケース・スタディ・ハウス・プログラム」にみられる理想住宅に関する研究^{注12)}のように、特定の建築様式の特徴と、対応する建築作品の構成との関係を検討するものなど様々である。その中でも本研究に関連する既往研究としては、現代日本の建築家の言説活動を総体的かつ相対的に分析したものとして、特定の言語内容に着目する研究、主題の意味内容に着目する研究などがあげられる。前者では竹内、岩岡らによるスケールに関する言説についての研究^{注13)}のように、建築設計において重要な側面のひとつに焦点をあて、それらに対する建築家の認識を検討するものがあり、後者では建物の用途あるいは部位などを限定することで、そうした特定の枠組みにおける建築家の設計論の主題の内容を検討する筆者らによるもの^{注14)}がある。これらに対して本研究は、一室空間形式の住宅の設計論に着目することで、特定の空間形式を前提とした具体性を伴って思考される建築家のコンセプトの内容とその思考の枠組みを検討するものである。

1. 3. 本研究の概要

本論の概要を述べると、2章では、資料とした一室空間形式の住宅の設計論を相互に比較することで、一室空間形式をもちいた意図として明確に読み取れる箇所を抽出し、その意味内容（『設計意図』^{注15)}）を検討する。例えば、図1の分析例No.20-2では、「この家は竣工届けを出して4年も経っているが、本当にはできあがっていない。永久に完成しないだろう。」といった箇所から、住宅は住まれ方により変化するものであり、未完成の状態としての一室空間をその根源的なあり方として求めるといった『設計意図』を読み取ることができる。さらに同分析例では「まずはコンクリートの箱だけをつくってあとはだんだんよくして行こうという計画をたてた。」とあ

るように、上述した『設計意図』を構想するにあたり、設計者は一室空間を生活機能とは無関係に切り取られたひとまとまりの空間として捉えていることが読み取れる。一方、分析例No.118では架構による空間の緩やかな分節を『設計意図』として論じると共に、行為に応じた幾つかの領域の連なりとして一室空間を捉えていることが分かる。これらの例のように、実際的にはさまざまな生活機能をもつ住宅としての一室空間をどのような領域的なまとまりとして捉えるかという内容は、根拠としての『設計意図』とあわせ、一室空間形式に関する建築家の思考の枠組みを検討する上で重要なものと考えられる。そこでこれを一室空間形式の《着目性質》^{注15)}として抽出し、『設計意図』とあわせて検討する。次に3章では、一室空間形式が「周囲から囲い取られたひとつの空間」であることを踏まえ、実際に設計された作品における、外部環境に対する一室空間形式の完結性を2つの水準から整理した上で、それらと『設計意図』及び《着目性質》との関係を総合的に検討・考察し、4章で結論を述べる。

2. 一室空間形式の住宅の設計意図と着目性質

2. 1. 設計意図の内容

前述した方法によって抽出した一室空間形式の住宅の『設計意図』を、KJ法^{注16)}に基づいて相互に比較検討した。その結果、それらは[住宅の原初性]^{注15)}[周辺環境との関係][場の分節手法][用途の一体化][柔軟性の獲得][工法の合理化]の6つの意味のまとまりとして捉えることができた(図2)。

[住宅の原初性]は、住宅の根本的な性質や、本来的な姿を求めた結果として一室空間形式を見出したと位置づけられるものであり、住宅を屋根などの構成要素とそれによって規定される空間に還元して捉えることで一室空間を見出す[被覆性]^{注15)}と、住宅の本来的なあり方を遡及した結果得られる根源的イメージを一室空間として位置づける[原型性]とから捉えることができる。[被覆性]には、内部空間を切り取る「囲い」さえあれば住宅は成立するというもの(88, 103, 113)^{注15)}、内部空間と無関係に「箱」のような単純で直裁的な形を住宅として捉えるもの(12, 42-2, 79-2, 93-1, 95-2)などがみられ、[原型性]には、何ら意味を発しない即物的な小屋としてのあり方に住宅の本来的な姿を求めるもの(60-2, 71, 82-1)、洞窟や原始的な小屋のように居住するという行為を喚起する始源的な住居像を求めるもの(56-2, 144, 150, 155-2, 164, 167-1)などがみられた。

[周辺環境との関係]は、自然や都市といった住宅を取り巻く周辺環境への対応を論じた結果として一室空間形式を見出したと位置づ

No.20-2 私の家 / 清家清 (SK5703)	『設計意図』 未完の状態 → [柔軟性の獲得] [住宅の原初性] 【空間的側面】	《着目性質》 まずはコンクリートの箱 だけを用意 → 〈均質的性質〉
No.118 ハウス・アサマ / アトリエ・ワン (SK0103)	『設計意図』 架構による領域 → [場の分節手法] 【空間的側面】	《着目性質》 各行為ごとの平面 → 〈連続的性質〉

図1 分析例

けられるものである。多くは周辺環境と調和した関係の中に一室空間を見出すものであり、住空間全体に周辺への視覚的な開放性を求めるもの（39, 40, 65, 75, 95-1, 105, 106, 111, 124, 125, 139, 154-2, 159, 167-2, 171-1）^{注15)}、建物に近接する屋外空間を含め全体を一体的に構成するもの（18-1, 20-1, 25-2, 30, 83, 97, 108-1, 117, 120-2, 121, 152, 157, 165, 170）、また、これらのように内外の空間相互の関係を問題にするのではなく、周辺環境のもつ特性への同調を明快にするために住宅を一室空間として構成するもの（72, 100, 107, 129, 130, 131, 145, 153-2）などもみられた。一方で、周辺環境と対立する関係の中に位置づけられるものとしては、外部環境に対するシェルターとしての住宅を意図するもの（21, 26, 37, 74, 77, 110, 112-2）がみられた。

「用途の一体化」は、機能にもとづいて空間を分割するのではなく、それらを一体化することで、用途によって制度化されない住宅の新たな可能性を探索するものであり、空間の体験的な性格について論じられる「視覚的表現」と、得られる効用について論じられる「性能の向上」とから捉えることができる。「視覚的表現」には、室と室の境界を取り払い、連続的なシーンの重なりの中に空間表現の可能性を求めるもの（43, 85-2, 92, 104-2, 114, 128-1, 155-1, 162）

^{注15)}、空間を一望できることで住まいとしての全体像の把握を容易

にするもの（22, 32-1, 49-2, 51, 52, 69, 73-2, 93-2, 154-1）などがみられ、「性能の向上」には、狭小敷地において住宅を個室によって細分化するのではなく、小さいながらも広がりを感じられるものとして一室空間を位置づけるもの（1-1, 7-2, 9-2, 20-1, 25-2, 35, 46-1, 73-1, 98, 115, 120-2, 122, 152, 170）、個室によって家族間のプライバシーを確保するよりも、コミュニケーションの促進を目的とするもの（2-2, 38, 90, 153-1）などがみられた。

「場の分節手法」は、ひとつつながりの空間の中に緩やかな分節を生む方法論について論じられるものであり、家具などの要素がつくりだす領域概念により論じられる「要素による分節」と、平面形状などの空間構成がもたらす特徴により論じられる「空間構成による分節」とから捉えることができる。「要素による分節」には、室内に現れる架構の反復性や差異により性格づけられる場の分節について論じられるもの（47, 70-2, 104-1, 118, 132, 174, 175-1）^{注15)}などがみられ、「空間構成による分節」には、水廻り設備を集約したコアなどによる空間の緩やかな分節について論じられるもの（23, 27-1, 45, 54-2, 136, 153-3, 163, 168, 171-2, 176, 177）、視覚的な奥行き感による空間の分離作用について論じられるもの（44, 134, 138-2, 142, 147, 160, 166）がみられた。

「柔軟性の獲得」は、生活様式の変化に対応するフレキシビリティ

図2 一室空間形式の住宅の設計意図

図2注：各々の意味内容の下に記した数字は資料とした論文の通し番号である。ひとつの資料より複数の設計意図が抽出されたものはさらに添番号をつけている。また、図中において線縁により示したものは意味内容のつながりが強いもので、矢印で示したものは意味内容が相反するものである。

図3 一室空間形式の着目性質と設計意図

を高めるものとして一室空間形式を提案したと位置づけられるものであり、間仕切りや移動可能な家具の変更により融通性を確保しようとする〔可変性〕と、どのような生活にも対応しうる骨格をもった空間をイメージする〔普遍性〕とから捉えることができる。〔可変性〕には、移動家具などの空間に配置されるものにより用途に対する互換性を担保するもの（11-1, 24, 25-1, 27-2, 50, 57, 80, 109, 127-2）^{注15)}、間仕切りなどを組み換えることにより家族構成や居住環境の変化への対応を可能とするもの（2-1, 6-2, 8, 18-2, 19, 46-2, 76, 86-2, 91, 94, 99, 101-2, 108-2, 116, 128-2, 173-2, 175-2）などがみられ、〔普遍性〕には、機能から解放された無限定な空間のイメージとして一室空間を見出したと捉えうるもの（14, 36, 64, 84-2, 101-1）などがみられた。

〔工法の合理化〕は、住宅を構築する上での工法の合理性を追求した結果として一室空間形式を選択したと位置づけられるものであり、部材の種類や形状の単純化に関する〔規格化〕と、構成要素そのものの削減に関する〔簡略化〕とから捉えることができる。〔規格化〕には、住宅の工業化のモデルを一室空間に見出すもの（15）^{注15)}や、セルフビルドの可能性を追求するもの（123）がみられ、〔簡略化〕には、構造材の削減や架構の単純化を意図するもの（3, 4, 5-2, 10-2, 16, 81）や、それらを前提とした経済的合理を追求するもの（42-1, 70-1, 120-1, 138-1）がみられた。

ここで住宅が社会的な枠組みの中でつくられる産物であることを勘案すると、これらの『設計意図』は、住まい手の居住性や、生産システムを前提に住宅を構築する合理性など、社会の中での住宅の機能性に留意した内容である【機能的側面】^{注15)}と、設計者自身の空間イメージへの志向性が優先される【空間的側面】といった建築家の立脚点に関する2つの大枠との関係から整理することができる。ここまで検討した全ての資料において、〔住宅の原初性〕および〔場の分節手法〕は【空間的側面】に、〔工法の合理化〕は【機能的側面】に該当することから、それぞれ両側面の固有の内容として位置づけるものと考えられるのに対し、〔柔軟性の獲得〕〔周辺環境との関係〕〔用途の一体化〕は双方にまたがる内容であることが分かる。

2. 2. 一室空間形式の着目性質

次に、建築家が一室空間をもちいる根拠としての『設計意図』とともに、住宅としての一室空間をどのような領域的なまとまりとして認識しているかといった『着目性質』について検討する。『設計意図』と同様に、全資料から『着目性質』が読み取れる記述を抽出し（209/225 資料）^{注17)}、その内容を比較整理した結果、それらは「室と室の間に壁やカーテンがあってはならない（2-2）」や「各室がひとつの空間として連結し…（75）」のように、機能的に分節される幾つかの領域が相互に連なったものとして一室空間を認識する〈連続的性質〉^{注15)}と、「真四角の一室の空間が…（25-1）」や「住宅全体を占めるひとつの広い空間（93-2）」のように、一義的に周辺環境から囲い取られたものとして一室空間を認識する〈均質的性質〉（以下、それぞれ〈連続〉〈均質〉と略記する）に大別することができた（図3）。

このような『着目性質』と前節で捉えた『設計意図』との対応を検討する。『着目性質』の内容として位置づけた〈連続〉〈均質〉ごとに『設計意図』の大枠との対応、および個々の『設計意図』の内容の内訳を割合としてグラフ化し、さらにそれぞれの通時的傾向を上下に示したものが図3である。まず『設計意図』の大枠との対応を比較すると、〈連続〉に比べ〈均質〉では【空間的側面】の割合が高いことが分かる。このことから、建築家が自身の空間イメージを実現しようとする際には、そうしたイメージを一室空間の一義的な性格として定着させることでコンセプトの明快さを求める傾向にあると考えられる。また内訳として示した『設計意図』との対応を比較すると、【機能的側面】では〈連続〉〈均質〉とも類似した分布を示しているのに対し、【空間的側面】では偏りがみられた。【空間的側面】/〈連続〉において〔場の分節手法〕が多くみられることは、場を緩やかに分節する空間イメージが、機能と空間とが一对一对応するような空間分節の図式性を打消すことと連関して思考されるためと考えられる。一方、【空間的側面】/〈均質〉において〔住宅の原初性〕〔周辺環境との関係〕が多くみられることは、建築家が空間の使われ方や生活機能を住宅の根本的な性質として捉えておらず、そうした機能によらない空間の一義的な性格に住宅の本来的な姿を

見出していること、環境の中での住宅のあり方を幾つかの領域の序列としてではなく、内部と外部という明快な対比の中に見出していることを示すと考えられる。

さらにこれらの通時的推移^{注18)}を検討したところ、50年代においては〈連続〉〈均質〉のどちらについても【機能的側面】が多くみられ、住まい手の居住性や住宅の性能を前提にコンセプトを提示することが、当時の建築家に課せられた命題のひとつであったことが分かる。その後、近年にかけての年代ごとの資料数の増加とともに〈均質〉における【空間的側面】の割合に伸びがみられるが、一方で〈連続〉における【空間的側面】については2000年代にその割合が急増する傾向がみられる。このことは、上述した『設計意図』の内訳の傾向を踏まえると、機能と空間との対応関係を解体するように場の緩やかな分節をコンセプトとすることが、近年の一室空間形式の住宅における建築家の新たな試みであることを示すものと考えられる。

3. 一室空間形式の完結性と設計意図

前章では、一室空間形式をもちいた建築家の思考を『設計意図』

と《着目性質》の2つの側面から検討した。一室空間形式が「周囲から囲い取られたひとつの空間」を前提としていることを鑑みると、実際に設計された一室空間が外部環境から切り離された完結的なものであるか、外部環境へと広がる拡張性をもつ非完結的なものであるかは、一室空間形式をもちいた建築家の思考の具体性をはかる上で重要な指標となりうると考えられる。そこで本章では、発表時の図面や写真を資料とし、一室空間形式の住宅の完結性を、一室空間を規定する外周壁の開放性と、地盤面に対する一室空間の接地性から分析し（それぞれ図4縦軸、横軸）、さらに、それらと《着目性質》および『設計意図』との対応を検討する。開放性は水平方向への視覚的広がり、接地性は鉛直方向における空間的なつながりに関する完結性をはかるものである^{注19)}。

3.1. 一室空間形式の完結性

一室空間の外周壁の開放性については、まず大開口の有無から〈開放〉^{注15)}と〈閉鎖〉^{注20)}、〈開放〉についてはさらにその平面的な配列形式から、〈開放（一方）〉と〈開放（多方）〉に分類した（図4縦軸）。〈開放（多方）〉は〈開放（一方）〉に比べ、方向性を限定

図4 凡例

資料数を面積比で示したもの
該当する資料番号とそれらの『設計意図』の内訳
※番号に「1」がつくものは複数の『設計意図』のまとまりを横断するものを示す。
原：住宅の原初性
一：用途の一体化
分：場の分節手法
周：周辺環境との関係
柔：柔軟性の獲得
工：工法の合理化

図4 一室空間形式の住宅の外部環境に対する完結性と設計意図・着目性質

図5 一室空間形式の住宅の設計意図と着目性質の典型的性格

しないという点で外部空間と様な関係をもつものといえる。開放性に関する数的傾向としては、{閉鎖} に比べ {開放} が多くみられた。また一室空間の接地性については、一室空間が接地し地盤面と連続的な関係にあるもの（{接地}）、ピロティにより空中に持ち上げられるなど、一室空間が地盤面から断絶した関係にあるもの（{非接地}）の2つに大別した^{注21)}（図4横軸）。その結果、{接地} のものが多くみられた。

3. 2. 一室空間形式の完結性と着目性質・設計意図

ここで、外部環境に対する一室空間形式の完結性について、『設計意図』の大枠、および《着目性質》とどのように関係しているかを考察するために、一室空間形式の開放性と接地性の対応ごとに、両者の関係をグラフ化したものが図4である。それぞれ左右に【空間的側面】【機能的側面】の、上下に〈連続〉〈均質〉の割合を示している。以下、一室空間形式の開放性ごとに比較・考察する。

まず、{開放（一方）}において、{接地} との対応に資料が多くみられるが、その際に論じられる内容は『設計意図』の大枠、および《着目性質》どちらの割合についても偏りがみられないことが分かる。このことは周辺環境と地続きに連続しながらも、視覚的な開放性に強い方向性をもつ一室空間が、建築家のコンセプトの内容によらない便宜的な表現として定型化したものと考えることができる。これに対し、{開放（多方）}、{閉鎖} では『設計意図』の大枠、《着目性質》との関係に典型的な傾向を見出すことができる。

{開放（多方）}において、{非接地} との対応では【空間的側面】/〈均質〉が多くみられ、{接地} との対応ではそうした傾向に加え【機能的側面】/〈連続〉も多くみられた。これらはともに視覚的な開放性により周辺環境へと様な関係を構築するものであるが、前者は地盤面から空間的に断絶することで一室空間の均質性を担保するものといえる。その際、[住宅の原初性]や[周辺環境との関係]を設計の根拠とするものが多くみられることから、空間的には大地から独立することで住空間を規定しながらも、視覚的にはどこまでも外延性をもつ空間に、建築家は住宅の理想的な姿をみていると考えられる。それに対し、後者は地続きに周辺へと接続することで、一室空間内の領域の連続性を外部まで拡張するものといえる。これらには[周辺環境との関係]と[用途の一体化]を併せもつものが多くみられることから、屋外空間を含めた内外の一体的な構成への試みは、視覚的にも空間的にも周辺環境と連続した空間によって展開されると考えられる。

さらに{閉鎖}において、接地性に関わらずともに【空間的側面】が多くみられるが、その中でも{非接地}との対応では〈均質〉に、{接地}との対応では{非接地}に比べ〈連続〉に偏る傾向がみられた。このことは、まず周辺から視覚的に隔絶することにより、自身の空間イメージに明快さを求める建築家の思考を示すものと考えられ、特に、前者では[住宅の原初性]が多くみられることから、周辺から徹底して切り離された世界に住宅の根源的なあり方を探求する建築家の姿勢が読み取れる。このことを、前述した{開放（多方）}/ {非接地}において同様の傾向がみられたこととあわせて考察すると、建築家は住宅の本質的なあり方を、環境と融合しながらも覆いによって場のみを規定した状態と、環境と対立するように内部空間が囲い取られた閉鎖的な状態といった対極的なあり方の双方に見出すことが分かる。さらに、後者の{接地}との対応において相対的

に〈連続〉に偏る傾向では、[場の分節手法]が多くみられることから、一室空間に緩やかに分節された領域をつくりだす修辭的操作への思考は、視覚的には隔絶しながらも、大地の上に水平的に広がる生活機能との関係の中に展開されるものと考えられる。

以上、{開放（多方）}、{閉鎖}でみられた『設計意図』の大枠、《着目性質》との関係における典型的な傾向を整理したものが図5である。これにより、建築家が住宅としての一室空間をどのような領域的まとまりとして認識するかは地盤面への接地性との連関から捉えられること、また一室空間をもちいる根拠として自身の空間イメージを優先するコンセプトは、地盤面からの断絶、あるいは周辺への視覚的な隔絶といったように、接地性、開放性の少なくともいずれかの水準において完結性をもった形式として思考されることを見出した。

4. 結

本論は、一室空間形式の住宅作品の設計論を、作品の実体的側面を含めて総体的に分析することで、特定の空間形式と連関した建築家の住宅設計論の内容とその枠組みを明らかにするものであった。まず、一室空間形式をもちいた建築家の設計意図がどのような内容で語られているかを、設計者自身の空間イメージが優先された内容であるか、住まい手の居住性や住宅の性能を前提とした内容であるかといった枠組みから捉え、それら大枠に包摂される具体的な意味内容との関係を整理した。次にそうした意図を実現する上で、設計者が一室空間を幾つかの領域を連続させた空間と認識しているか、あるいは均質なまとまりとしての空間と認識しているかを捉え、それらと一室空間形式に関する設計意図との関係を考察することで、一室空間形式の一義的な均質性により、建築家が自身の空間イメージに明快さを求める傾向にあることを示した。

さらに、このような一室空間形式をもちいた建築家の思考の具体性を検討するため、外部環境に対する一室空間形式の完結性に着目し、実際に設計された作品における外周壁の開放性と、地盤面に対する接地性を整理し、これらを踏まえ、設計意図、および着目性質と、一室空間形式の完結性との対応を検討した。その結果、生活空間を大地の上に展開しながらも、外部への開放性に強い方向性をもった一室空間が、建築家の様々なコンセプトとは無関係に成立する通俗的な表現として定型化していること、それに対し、さまざまな生活機能をもつ住宅を一室空間として提案する建築家の試みの典型は、まず外部環境への視覚的開放性・閉鎖性を一元的に関係づけることを前提としており、特に、均質なまとまりとしての一室空間は地上より切り離された空間的な完結性の中に見出だされること、また、幾つかの領域の連なりとしての一室空間は周辺環境までへと地続きに連続する空間的な広がりの中に見出されることを示した。

注

注1) 本研究における一室空間形式の住宅とは、平面内に浴室、トイレ、納戸などの設備的な機能をもつ諸室以外の明確な分節が存在せず、住空間が外部空間からの分節のみによって成立しているものとしている。その際、開け放せることが前提となる間仕切りによる分節や、床仕上げの差異による分節、床の段差による分節は考慮しないものとする。また複数層からなる住宅において、その住宅の主室をもつ層が一室空間形式になっているものも資料としている。

- 注2) ここでは、主に建築作品あるいは建築論をジャーナリズムに発表することによって、建築の表現活動としている建築の設計者をさして建築家とよんでいる。その上で、建築家の表現活動を建築の創作活動と言説活動のふたつで大きくは構成されとしている。
- 注3) 清家清は「一室住居のひとつのあり方として、機能別につくられた数室の壁や扉が透明になって、退化消失したものが、一室住居であってほしい」(参考文献1)と述べており、分節された室の集合としての住宅を解体することに一室空間の可能性を見出している。
- 注4) たとえば、伊東豊雄は篠原一男の創作活動を論じる際に、篠原の言葉と実体化された空間の間に生じるズレを指摘すると同時に、そうしたズレを埋めるように引き出された新しい言葉が新しい空間を誘発し、誘発された実体としての空間が再び新しい言葉を紡ぎだすといった相補的な振幅運動に創作活動の力の源を見出している(参考文献2)。
- 注5) 「ユニヴァーサル・スペース」という言葉は、一般にミースの提唱した空間概念として知られるが、ミース自身が最初に述べた時期を特定することは、著作の少なから困難である(参考文献3)。しかし、八束によれば、アダム・ビル・プロジェクトでのクライアントへ宛てた手紙にその萌芽的記述を見いだせる(参考文献4)。また藤岡によれば、この言葉が日本の建築誌上で最初に紹介されたのは1953年であり、

それはミースの講演の和訳としてであった(参考文献5)。

- 注6) このような近代主義建築の空間言語として、他に、コア型平面やピロティ、屋上庭園などがあげられる。このうちコア型平面については、既報(拙稿:参考文献6)で取り上げており、そうした空間言語を用いた現代の建築家の思考の枠組みについて報告している。
- 注7) たとえば坂本卓は、ル・コルビュジエが『新しい建築の5つの要点』で示した5つの建築言語それぞれが、建築の部分における設計概念であることを指摘すると同時に、現代の建築的潮流における部分設計の概念の重要性について論じている(参考文献7)。
- 注8) 本研究では、建築専門誌のなかで最も代表的と思われるものであり、長期にわたって継続的に発行された「新建築」誌(SK)、「新建築 住宅特集」誌(JT)、「建築文化」誌(KB)に掲載された作品を対象とし、その作品解説文から一室空間形式をもちいた意図が明確に読み取れるものを資料としている。また、日本において大きく社会構造が変革した第2次世界大戦以降を現代と設定し、特に、住宅の質的向上を目的に建築基準法、建築士法や住宅金融公庫法などの法整備が進められた1950年以降から2010年までを資料の対象期間としている。この範囲において、177作品(付表1)の中から225の設計意図(意味単位)を資料として抽出している。

付表1 資料表

資料番号	掲載誌	作品名	設計者	年代ごとの代表的作品	
1 SK 5007	立体最小限住居の試み	池田陽	No.3	No.7	
2 SK 5109	森博士の家	清家清			
3 SK 5207	最小限住居の試作	増沢茂			
4 SK 5305	正方形の家	番匠谷亮二			
5 SK 5309	三人姉妹の家	堀田尚之			
6 SK 5311	空城教授の家	清家清			
7 SK 5311	SH-1	広瀬謙二			
8 SK 5311	木造試作小住宅	田村博			
9 SK 5403	一室住居の試み	吉島一夫			
10 SK 5411	住宅No.20	池田陽	No.10	No.14	
11 SK 5411	住宅No.21	池田陽			
12 SK 5411	牧野さんの家	橋田一豊			
13 SK 5412	橋の木のあそび	山口勝治			
14 SK 5501	住居	舟下健三			
15 SK 5503	猿丸邸	広瀬謙二			
16 SK 5505	O夫人のすまい	山田雅子			
17 SK 5511	住宅No.28	池田陽			
18 SK 5511	浦和の家	山梨清松			
19 SK 5608	マヤの家	清家清	No.20	No.21	
20 SK 5703	私の家	清家清			
21 SK 5712	Villa Cou Cou	坂田隆正			
22 SK 5809	橋田に建つ家	林孝子			
23 SK 5809	坂邸	協賛			
24 SK 5901	菊竹自邸(スカイハウス)	菊竹清訓			
25 SK 5906	7坪の小住宅	斎藤英彦			
26 SK 5908	大阪郊外のF邸	深谷浩一			
27 SK 5910	久我山の家 その2	篠原一男	No.24	No.22	
28 SK 5906	丸山邸	堀田尚之			
29 SK 6104	田中邸	堀田尚之			
30 SK 6110	R邸	堀田尚之			
31 SK 6205	5階席のフロアを持つ住宅	茶谷正洋			
32 SK 6210	からかさの家	篠原一男			
33 SK 6404	土間の家	篠原一男			
34 SK 6408	老夫婦のはなれ	高野康夫			
35 SK 6408	白川邸	堀口清己			
36 SK 6501	すまい	藤本忠善	No.32	No.36	
37 SK 6701	山荘・もうびいていっく	宮脇俊吉			
38 KB 6706	東光の家	東孝光			
39 SK 6805	橋原のすまい・牛谷邸	東孝光			
40 SK 6812	千々濤の家	清家清			
41 SK 7104	鶴ヶ浦の家	林雅子			
42 SK 7202	葉辻邸	東孝光			
43 SK 7208	サ・デザイン・ハウス・資料	木島安史			
44 SK 7208	焼津の家	長谷川逸子			
45 SK 7404	沖崎の家	金堀信吉			
46 SK 7408	世・北沢の家	香田由美子	No.37	No.38	
47 SK 7502	北山・住宅	白石宏規			
48 SK 7502	余白の家	伊丹野			
49 SK 7504	山中湖のアトリエ	内田繁			
50 SK 7808	山本理顕	山本理顕			
51 SK 7902	南湖の家	坂本一成			
52 SK 7902	坂田山附の家	坂本一成			
53 SK 7910	橋本邸(原宿001)	渡辺良和			
54 SK 8002	橋本邸	八木孝二			
55 SK 8008	Yコートハウス	葉祥栄	No.47	No.49	
56 SK 8008	川の家	緒方理一郎			
57 SK 8308	風格子の家	葉祥栄			
58 JT 85夏	リトル・ハウス	白澤宏規			
59 JT 8609	茅ヶ崎の家	石田敏明			
60 JT 8609	馬込の家	伊東豊雄			
61 JT 8610	妻倉	白石宏規			
62 JT 8707	甲斐屋の家	石井修・久米智子			
63 JT 8710	KAMERA	北川原温			
64 JT 8810	PLATFORM	妹島和世	No.50	No.51	
65 JT 8810	尾山台の住宅	長谷川逸子			
66 JT 8910	HAKONE HUT	増田泰一			
67 JT 8911	千歳の家	入江純一			
68 JT 9001	緑ヶ丘の住宅	竹山聖			
69 JT 9001	馬場の家	中村好文	No.57	No.60	
70 JT 9007	PLATFORM II	妹島和世			
71 JT 9008	御殿場のガラス小屋	室伏次郎			
72 JT 9009	PALETTE	塚本由晴			
73 JT 9010	桜丘の家	北山恒			
74 JT 9101	大山町の住宅	渡辺明			
75 JT 9112	STEEL RAINBOW	エドワード・鈴木			
76 JT 9303	山荘	木村博昭			
77 JT 9304	岩倉山荘・原アトリエ	岩倉孝			
78 JT 9310	立川の家	北山恒			
79 JT 9311	小さい木箱	葛西泰			
80 JT 9312	GYRO・HOUSE	増田泰			
81 JT 9401	筑波・奥の家	内藤廣	No.63	No.64	
82 JT 9405	Barn-3	吉本剛			
83 JT 9405	H	青木淳			
84 JT 9406	岡山平公園の住宅	岡山信一・若松均			
85 JT 9408	NO.5	石田敏明			
86 JT 9409	HOUSE TM	小嶋一海			
87 JT 9506	ドラキュラの家	石山修武			
88 JT 9510	本町田の住宅	岡山信一			
89 JT 9510	大きい木箱	葛西泰			
90 JT 9511	富士の住宅	安井雅裕			

資料番号	掲載誌	作品名	設計者	年代ごとの代表的作品	
91 JT 9512	紙の家	坂茂	No.68	No.78	
92 JT 9604	百日紅閣	斎藤裕			
93 JT 9604	傾斜地の木箱	葛西泰			
94 JT 9607	SUM HOUSE1996	高橋品子・寛			
95 JT 9608	大塚町の住宅	有馬裕之			
96 JT 9705	HOH	白澤幸			
97 JT 9711	壁のない家	坂茂	No.85	No.86	
98 JT 9711	ちっちゃな家	杉浦伝宏			
99 JT 9712	読売メディア・ミヤギ・ゲストハウス	阿部仁史			
100 JT 9802	アニ・ハウス	塚本由晴・貝島純代			
101 JT 9805	9スクウェア・グリッド	坂茂			
102 JT 9805	A LITTLE HOUSE	白川直行			
103 JT 9808	並分の山荘	斎藤政樹・池田昌弘			
104 JT 9811	ウィークエンド・ハウス	西沢立衛			
105 JT 9903	保土ヶ谷の住宅	佐藤光彦			
106 SK 9906	ナチュラルユニットノスタジオハウス	遠藤政樹・池田昌弘			
107 SK 9908	川西町コテージB	塚本由晴	No.93	No.97	
108 JT 9908	Z-HOUSE	北山恒			
109 JT 9910	ナチュラルシェルター	青木淳			
110 JT 9910	TAKAHASHI HÜTE	遠藤政樹・池田昌弘			
111 JT 9911	鎌倉の家	渡辺康			
112 JT 9911	鎌倉の家	手塚貴晴・由比			
113 JT 0002	仙川の住宅	佐藤光彦			
114 JT 0003	KUSハウス	石田敏明			
115 SK 0011	小さな家	妹島和世	No.100	No.104	
116 JT 0101	はたけの家	坂茂			
117 SK 0103	藤崎のミグホンハウス	手塚貴晴・由比			
118 SK 0103	ハウス・アサマ	手塚貴晴・由比			
119 JT 0103	安城のスタジオ	竹山聖			
120 SK 0108	Hut T 2001	坂本一成			
121 JT 0108	西所沢の住宅	佐藤光彦			
122 JT 0110	鎌倉の住宅	西沢立衛			
123 JT 0111	ブライウッド・キット・ハウス	八木淳子			
124 JT 0111	壁のない家	手塚貴晴・由比	No.109	No.112	
125 JT 0111	丸ノコニーの家	手塚貴晴・由比			
126 SK 0201	入江のゲストハウス	塩塚泰			
127 JT 0204	Tokyo トーキョー	吉松秀樹			
128 JT 0205	レス・プラス	竹内誠			
129 JT 0206	ダス・ハウス	塚本由晴・貝島純代			
130 JT 0208	ピクチャー・ウィンドウの家	坂茂			
131 SK 0210	ナチュラルエリプス	遠藤政樹			
132 JT 0212	矩形の森	五十嵐淳	No.115	No.118	
133 JT 0307	空を捕まえる家III	手塚貴晴・由比			
134 SK 0308	しじま山荘	藤本壮介			
135 JT 0312	台形面の家	岩間電夫			
136 JT 0312	HOUSE KI	赤松佳子			
137 JT 0401	縁側の家	手塚貴晴・由比			
138 JT 0409	トラス下の矩形	五十嵐淳			
139 JT 0410	クス・ハウス	塚本由晴・貝島純代			
140 JT 0410	森を捕まえる家	手塚貴晴・由比			
141 JT 0501	隙切りの家	手塚貴晴・由比			
142 SK 0505	T house	藤本壮介	No.121	No.132	
143 JT 0505	大野の家	谷民誠			
144 JT 0508	府中の家	堀部安綱			
145 JT 0511	空の光の家	植名英三			
146 JT 0601	高円寺の住宅	奥山信一			
147 JT 0603	上志津の家	三井隆一			
148 JT 0607	SHIP	宮本佳明			
149 JT 0611	輪の家	武井誠・鍋島千恵			
150 SK 0612	Y HÜTE	横河健			
151 JT 0702	コートハウス	石黒由紀	No.142	No.146	
152 JT 0706	コトバノイエ	矢部達也			
153 JT 0708	六会の家	千葉学			
154 JT 0708	三ツ沢の住宅	安田幸一			
155 SK 0711	House O	藤本壮介			
156 SK 0712	鶴山荘	塚本由晴・貝島純代			
157 JT 0801	谷間の日時計の家	古谷誠章			
158 JT 0801	環の家	武井誠・鍋島千恵			
159 JT 0804	Fuji View House	横河健			
160 JT 0806	ナチュラルスプリット	遠藤政樹	No.167	No.169	
161 JT 0806	AOハウス	石田敏明			
162 SK 0809	house K	宮品子			
163 JT 0810	YY	彦根明			
164 JT 0811	雨晴れの住居	原田真宏・麻魚			
165 SK 0901	高野の山荘	五十嵐淳			
166 JT 0902	龍の門	中村拓志			
167 JT 0905	HOUSE C	古谷誠章			
168 JT 0908	麓庵	宮品子			
169 JT 0908	house I	宮品子			
170 JT 0909	鈴江の住宅	長谷川康	No.170	No.174	
171 JT 0910	三日月の家	坂茂			
172 SK 0910	方の家	武井誠・鍋島千恵			
173 JT 1001	南が丘の山荘	古谷誠章			
174 JT 1002	Tree house	原田真宏・麻魚			
175 JT 1005	茅ヶ崎の家	千葉学			
176 JT 1009	ツイノスミカ	石田英一・高木昭良			
177 JT 1010	多面体の屋根・幾何学的な	横河健			

注9) ここでの分析、および検討内容は、拙稿（参考文献8）を修正し、発展させたものである。

注10) 参考文献9), 10), 11), 12), 13)

注11) 参考文献14)

注12) 参考文献15)

注13) 参考文献16)

注14) 参考文献17)

注15) 本論では下記のように括弧を使い分けている。

『 』：一室空間形式の住宅の設計意図の意味内容を示す際に『設計意図』と記す。

【 】：『設計意図』のカテゴリー、第1水準。

[]：『設計意図』のカテゴリー、第2水準。

[]：『設計意図』のカテゴリー、第3水準。

《 》：一室空間をどのような領域的なまとまりとして認識しているかといった内容を示す際に《着目性質》と記す。

〈 〉：《着目性質》のカテゴリー。

{ }：一室空間形式の住宅の外部環境への完結性のカテゴリー。

()：資料番号。

注16) KJ法とは民族地理学の分野で川喜田二郎によって考案されたものとして知られており、何らかの問題提起から状況把握、そしてそれに対する解決のプロセスまでの一連の方法をいう。ここではそのなかで、ある問題をめぐって問題のあり得る情報を集め、定性的データとし、意味の分かるような全体像とするまでのプロセスを狭義でのKJ法としている（参考文献18）。

注17) 《着目性質》と『設計意図』は基本的にはそれぞれ独立した文章として抽出できるが、資料によってはそれらがひとつの文章中に複合して現れることもある。その場合、ひとつの文章をそれぞれの視点から読み解くことでその内容を区分し、抽出している。《着目性質》に関する記述がみられないものは16資料あり、そのうち【空間的側面】の内容のものは3資料、【機能的側面】の内容のものは13資料であった。なお、これら16資料については、以降の分析から除外している。

注18) 図3では、《着目性質》ごとの『設計意図』の大枠の通時的推移を示している。ここでは付表2にて、補足的に『設計意図』の内容ごとの通時的推移を示す。括弧内の数字はそれぞれの内容ごとの『設計意図』の大枠の内訳を示しており、左が【空間的側面】、右が【機能的側面】に該当する資料数である。

付表2 年代ごとの設計意図の内容の数

設計意図 年代	住宅の原初性 (38)	空間の一体化 (60)	場の分節手法 (30)	周辺環境との関係 (54)	柔軟性の獲得 (56)	工法の合理化 (15)
1950年代	4(4/0)	14(1/13)	2(2/0)	5(2/3)	14(2/12)	9(0/9)
1960年代	4(4/0)	4(1/3)	1(1/0)	4(3/1)	3(2/1)	0(0/0)
1970年代	3(3/0)	5(4/1)	4(4/0)	1(1/0)	4(4/2)	1(0/1)
1980年代	7(7/0)	2(1/1)	1(1/0)	3(2/1)	7(4/3)	0(0/0)
1990年代	12(12/0)	12(5/7)	2(2/0)	17(11/6)	21(7/14)	2(0/2)
2000年代	8(8/0)	23(8/15)	20(20/0)	24(14/10)	7(2/5)	3(0/3)

注19) 一室空間の完結性を検討する上で、一室空間を規定する輪郭形状の複雑性も指標のひとつとして挙げられる。しかし、そうした形の複雑性は、幾何学がもたらす一室空間の自律的な完結性に関する指標と捉えることもでき、必ずしも外部環境との関係を前提とした完結性に関する指標といえるものではない。ここでは外部環境に対する一室空間の完結性を測るという観点から、開放性と接地性に着目している。

注20) 一室空間の開放性を検討するにあたり、開口による視覚的な開放性と、動線的な接続性を前提とした開放性のふたつの指標が考えられる。ここでの分析は、外部環境に対する一室空間の完結性がどのような実体的側面に現れるかについて検討するものであり、動線的な接続性は一室空間を規定する外周壁の実体表現と必ずしも連関しないと考え、大開口の有無による視覚的な開放性を分析の指標として優先している。ここで大開口とは、立面の面積の1/2以上を占める面積をもつ開口を基本とし、幾つかの開口の面積の合計がそれと同等と認められるものも含めている。また、フルハイトの開口部についてはその幅が立面の1/3以上を占めるものを大開口としている。

注21) 注1で示したように、本研究では複数層からなる住宅についても、主室をもつ層が一室空間形式であれば資料としている。このような複数層からなる一室空間形式の住宅については、主室をもつ層が接地しているかどうかにより一室空間の接地性を判断している。また傾斜地に立地する作品における接地性の判断基準としては、一室空間にあたる層が、その下部に人が活動することのできる充分な大きさをもった空間を有するものを（非接地）としている。

参考文献

- 1) 清家清：一室住居論，建築と社会，日本建築協会，1958.4
- 2) 伊東豊雄：ロマネスクの行方，風の変様体，青土社，1989
- 3) 塩崎太伸，奥山信一：現代日本の建築家の設計論にみられる空間をもちいた創作言語－空間という語を利用した建築的思考の文脈と形式に関する研究，日本建築学会計画系論文集，NO.633，pp2333-2340，2008.11
- 4) 八束はじめ：ミースという神話－ユニヴァーサル・スペースの起源，彰国社，2001
- 5) 藤岡洋保，鈴木達也：日本の建築雑誌に示されたルートヴィヒ・ミース・ファン・デル・ローエの評価，日本建築学会計画系論文報告集，NO.418，pp.147-153，1990.12
- 6) 四ヶ所高志，奥山信一：現代日本の建築家によるコア型平面をもつ住宅の設計意図と構成形式－近代主義建築の空間言語を題材とした現代建築家の住宅設計論に関する研究，日本建築学会計画系論文集，NO.670 pp2291-2298，2011.12
- 7) 坂牛卓：建築の規則，ナカニシヤ出版，2008
- 8) 加藤拓郎，奥山信一，他：一室空間形式の住宅の設計意図－建築家の住宅設計論に関する研究(2)，日本建築学会大会学術講演梗概集F-2，pp.657-658，1999
- 9) 横山志穂，坂本一成，他：構成材の分節による内部空間の構成と外部との関係－ワンルーム住宅における空間の分節と統合(1)，日本建築学会大会学術講演梗概集F-2，pp.515-516，2000
- 10) 横山志穂，坂本一成，他：構成類型とその統合的性格－ワンルーム住宅における空間の分節と統合(2)，日本建築学会大会学術講演梗概集F-2，pp.517-518，2000
- 11) 吉川寛華，坂本一成，他：場の形成とその連続：部位の分節によるワンルーム型住宅の領域構成(1)，日本建築学会大会学術講演梗概集F-2，pp.687-688，2005
- 12) 吉川寛華，坂本一成，他：場の組合せと配列による領域構成：部位の分節によるワンルーム型住宅の領域構成(2)，日本建築学会大会学術講演梗概集F-2，pp.689-690，2005
- 13) 高橋真理，美濃部幸郎，他：ワンルーム住宅における内外の場のまとまり－現代日本の都市住宅作品における場の分節と統合に関する研究(1)，日本建築学会大会学術講演梗概集F-2，pp.715-716，2004
- 14) 佐野潤一：ミース・ファン・デル・ローエのファンズワース邸の室内平面に隠れている黄金比について，日本建築学会計画系論文集，NO.466，pp183-188，1994.12
- 15) 那須聖，八木幸二，他：「ケース・スタディ・ハウス・プログラム」に見られる理想住宅－建築家の言説と建築構成の比較を通して，日本建築学会計画系論文集，NO.508，pp.249-255，1998.6
- 16) 竹内宏俊，岩岡竜夫，他：建築におけるスケールの概念について，日本建築学会計画系論文集，NO.594，pp.231-236，2005.8
- 17) 横山天心，奥山信一，他：建築家による構法をテーマとした住宅の設計論にみられる設計意図と構築モデル－現代日本の建築における技術と意匠の関係に関する研究(2)，日本建築学会計画系論文集，NO.610，pp.71-77，2006.12
- 18) 川喜田二郎：発想法，中央公論社，1967

(2011年11月10日原稿受理，2012年3月21日採用決定)